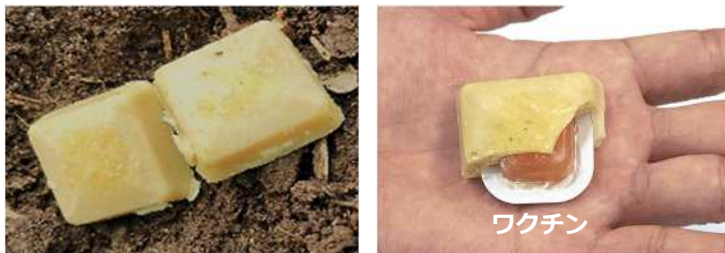
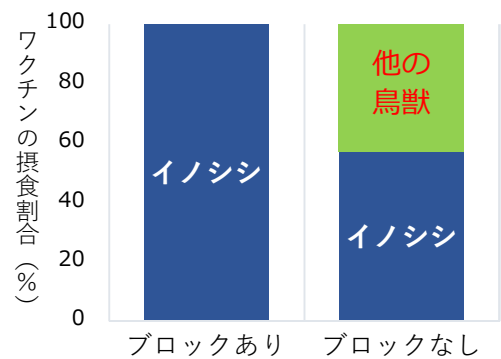




ブロック穴にワクチンとエサを入れて設置



豚熱経口ワクチン  
(ワクチン液を練りトウモロコシ粉でコーティング)



ブロックを用いた手法では  
イノシシの摂食割合は100%

## イノシシへの効果的な豚熱経口ワクチンの散布法を開発

本県では、豚熱対策として、野生イノシシに経口ワクチン(食べるタイプのワクチン)を与えることで、感染拡大防止に努めています。

しかし、イノシシが食べる前に、カラスやキツネなど他の鳥獣にワクチンを食べられてしまうことが問題となっています。そこで、イノシシの身体能力に着目し、イノシシのみにワクチンを食べさせる方法を開発しました。

この方法は、市販のコンクリートブロックの穴にワクチンとエサを入れて設置し、力の強いイノシシだけにブロックを倒させて、ワクチンを食べさせる方法です。

難しい技術は必要なく、安価で容易に実施できる方法であるため、豚熱経口ワクチンの野外散布を実施している全国の各地域で活用することが可能です。(環境基盤研究部)



## イチゴに関する消費者の嗜好性を解析

### 消費者のイチゴの嗜好性

【購入や情報入手の場所】  
購入場所はスーパー、情報入手の場所はお店が多い

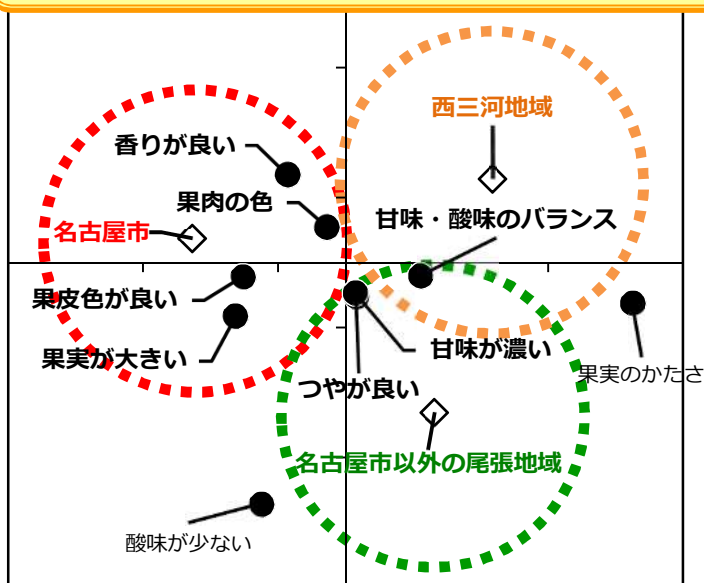
【好まれる食味・外観】  
「甘味・酸味のバランスが良い」、  
「甘味が濃い」、「果実が大きい」

【購入基準】  
「価格」、「傷みが少ない」、  
「つやが良い」が重視される

【スイーツ】  
味、食感、見た目の良さが重視される

など

本県産イチゴ  
新品種の  
ブランド化  
推進に活用



居住地域とイチゴの好きな理由の相関

※◇が居住地域、●は好きな理由：◇の居住地域に近い●ほど相関が高い



「愛経4号」(ブランド名「愛きらり※」)  
果実が大きく、つやがあり、良食味

※「愛きらり」はJAあいち経済連の登録商標です。

当场では、JAあいち経済連と共同でイチゴ新品種「愛経4号」(2021年5月品種登録出願公表中。ブランド名「愛きらり」)を育成しました。

本県産イチゴ新品種のブランド化推進に資するため、県内消費者500名を対象に、イチゴに関するニーズや購買意識を調査し、嗜好性を解析しました。

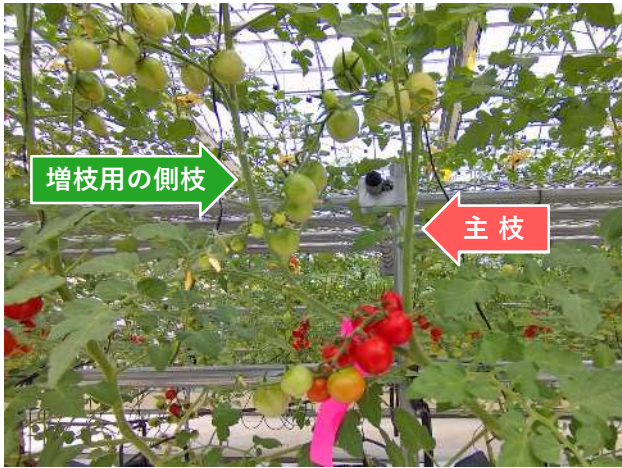
イチゴの購入場所や情報の入手場所、好まれる食味や外観、購入基準、イチゴのスイーツを購入する際に重視する点について、県内消費者の嗜好性が明らかとなりました。

県内消費者の居住地域とイチゴの好きな理由の相関では、名古屋市内は「果皮色が良い」・「果実が大きい」・「香りが良い」・「果肉の色」、名古屋市以外の尾張地域は「つやが良い」・「甘味が濃い」・「甘味・酸味のバランス」、西三河地域は「甘味・酸味のバランス」との相関が強いと考えられました。

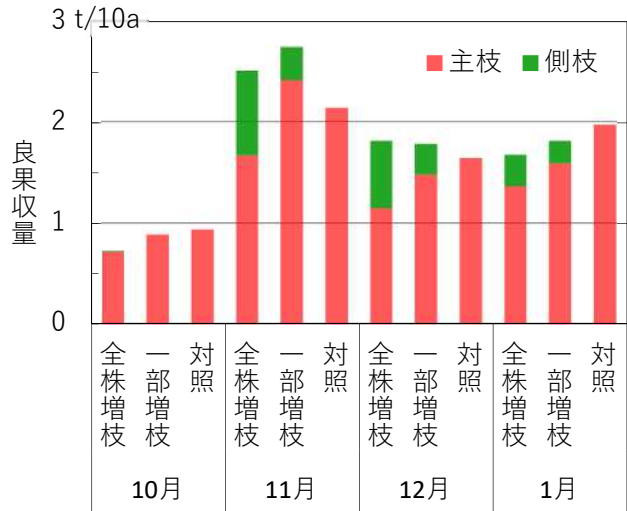
これらの結果は、関係機関と共有を図り、本県産イチゴ新品種のブランド化推進に活用していきます。(研究戦略部)



## ミニトマトの増枝による初期増収技術を開発



増枝の状況（左の側枝を増枝に利用）



10月～1月の月別良果収量

### ミニトマトの期間別収量

処理区	高単価期 (10/1～11/30)					全期間 (10/1～翌4/28)				
	総収量 (t/10a)	良果収量 (t/10a)	対照区比 <sup>1)</sup> (%)	良果率 (%)	一果重 (g)	総収量 (t/10a)	良果収量 (t/10a)	対照区比 <sup>1)</sup> (%)	良果率 (%)	一果重 (g)
全株増枝	3.42	3.23	105	94.4	10.4	15.51	14.13	104	91.1	13.3
一部増枝	3.93	3.64	119	92.6	11.4	16.30	14.78	108	90.7	13.7
対照	3.11	3.07	100	98.7	12.2	15.19	13.65	100	89.9	14.0

栽植密度は、2700株/10a 増枝方法は、主枝第2果房直下の側枝を伸長させ側枝第5果房まで収穫  
各区とも主枝からの収穫開始は2021年10月1日 増枝区側枝からの収穫開始は全株増枝区で10月29日、  
一部増枝区で11月1日、両区とも1月28日に収穫終了  
1) 対照区の良果収量を100としたときの比率

本県のミニトマト生産では、7月～8月に定植し、9月から翌年7月頃まで収穫する促成長期栽培が広く行われています。

通常、側枝は全て切除し、1株に1本の主枝のみ伸長させますが、一部には日射量が多くなる栽培後半に側枝も伸長させる増枝を行って、増収を図る生産者も見られます。

この技術をヒントに、日射量が多い栽培初期の増枝によって、ミニトマトの市場取引価格が高い11月までの収量を増やす技術を検討しました。

試験区は全株増枝する全株増枝区、3株に1株の割合で増枝する一部増枝区、増枝の処理を行わない対照区の3区としました。

10a当たり良果収量を対照区と比較すると、高単価期では全株増枝区で5%、一部増枝区で19%多くなり、全期間では、全株増枝区で4%、一部増枝区で8%多くなりました。また、側枝からの収穫は11月が最も多くなりました。

一果重はいずれの期間も対照区が最も重く、全株増枝区が最も軽くなりました。

一部増枝区は全株増枝区と比べ、良果収量が多く、一果重も大きいことから、初期増収には一部増枝が適していると考えられます。

今後は、密植や給液管理改善試験に取り組み、さらなる増収を狙います。

(東三河農業研究所)

# 研究トピックス

## ウェビナーを利用した消費者調査を実施

アジサイの消費者ニーズを把握するため、ウェビナー（オンライン配信のセミナー）を利用したアンケート調査を行いました。

ウェビナーを利用した調査は、全ての回答者に均一なインタビューができます。また、Webカメラで読み取った回答者の映像について、アイトラッキングやAIによる感情分析を行うことで、消費者行動の解明に役立つことが期待されます。（研究戦略部）



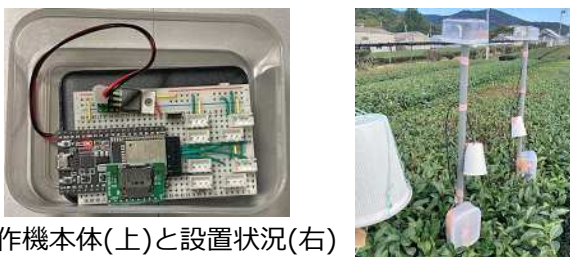
ウェビナーによるアンケート調査の様子

本研究は、県と企業等が連携し、ICTの活用により課題解決を目指す「AICHI X TECH（あいちクロステック）」事業により実施しました。

## 安価な環境モニタリング装置を試作

生産性向上のため、施設園芸を中心に栽培環境モニタリング装置の導入が進んでいます。利用者からは、多地点モニタリングを希望する声がありますが、装置の多くは高額であり、現状では1地点のみの事例が多い状況です。

本研究では、安価かつ十分な性能を持つIoT端末に注目し、低コストなモニタリング装置を試作しました。これにより、多地点モニタリングの実現や、これまで導入が進んでいなかった露地野菜や茶園においても環境モニタリングが可能となります。（環境基盤研究部）



試作機本体(上)と設置状況(右)

本研究は「あいち農業イノベーションプロジェクト」でセンスコム合同会社と共同で実施中です。

## 牛の新しい発情検知通知システムの開発

酪農、肉用牛経営では、発情の見逃しは人工授精の成功率が低下し経済損失が大きいと、様々な発情検知・通知システムが販売されています。しかし、その多くは牛に装着するタイプで、飼養者及び牛の負担が大きくなっています。

そこで、両者への負担軽減を目的として、牛の発情を鳴き声と常時観察できるカメラ画像から検知して個体識別する新しい非装着型の発情検知通知システムの開発に取り組んでいます。

(畜産研究部)



### 【発情行動】

本システムで  
検知・個体識別

発情初期個体(左)と人工授精適期個体(右)：背中から乗りかかれても拒絶しない)

本研究は「あいち農業イノベーションプロジェクト」で愛知県立大学とファーマーズサポート株式会社と共同で実施中です。

## ジネンジョ用の全量基肥肥料を開発

ジネンジョの安定生産を図るため、養分吸収特性に基づいた全量基肥栽培用の肥料を開発しました。

山間農業研究所内及び現地試験の結果から、ジネンジョのポリマルチ栽培において、この肥料を用いることで、追肥作業を省力化でき、慣行肥料と同等の収量が得られることが分かりました。

新開発の肥料は2023年1月に販売が開始されジネンジョ産地への普及が進んでいます。

(山間農業研究所)



ジネンジョ ポリマルチ栽培

本研究はJAあいち経済連と共同で実施しました。

### 収穫時調査(2020年)

	新生芋長	新生芋重
新肥料	131cm	513g
慣行	131cm	510g

試験場所：豊田市稲武町